

フランス文学研究室 NEWS

平成 30 年 4 月 6 日
第 6 号

この号の内容

- 1 イベント報告
- 2 在学生数
- 3 平成 29 年度修了生進路
- 4 学部生版 留学体験記 「C'est la vie ! (人生こんなもんさ)」
- 5 卒業生の声 「当たり年」
- 6 留学生の声 「中国における外国語教育」
- 7 大学院生版 留学体験記 「二度目のフランス留学」
- 8 大学院生の声 「東北大学フランス語学フランス文学研究室へ編入して感じたこと」
- 9 卒業生の声 「フランスで日本語教育に携わって」
- 10 編集後記
- 11 ホームページ紹介

イベント報告

- 2017 年 6 月 7 日 アンドレ・ギュイヨール先生（パリ第四大学教授）講演会「シャルル・ボードレール《不運》の異文について」
- 2017 年 9 月 25 日 クロード・ジェルマン先生（ケベック大学名誉教授）仏語教授法強化講座「いま、外国語をどう教えるか？ —フランス語を例に—」
- 2017 年 9 月 30 日 坂巻康司先生（国際文化研究科）主催 シンポジウム「象徴主義と〈風景〉」
- 2018 年 2 月 21・22 日 黒岩卓先生、エステル・ドゥーデ先生（グルノーブル＝アルプ大学教授）主催 国際研究集会「知の翻訳とその方法」

在学生数

博士後期課程 6 名 学部生 7 名
博士前期課程 2 名 研究生 2 名 計 17 名

平成 28 年度修了生進路

東北大学フランス文学研究室助教就任 1 名
科目等履修生として引き続き在学 1 名

学部生版 留学体験記 C'est la vie ! (人生こんなもんさ)

なぜ自分がフランスに、そしてこのレンヌという街に留学したのか。振り返ると、思った以上にこれという理由が見当たらない。ぼんやりと描いていた留学への憧れ。なんとなく始めたフランス語から吹いてくる心地よい新鮮さと未知の世界観。始まりはその程度だった。

いざ現地での生活が始まるや否や、レンヌの“カウンター”が綺麗に私の精神を打ち砕いた。3, 4 発だろうか、私が“ジャブ”を出したのは、何も出来ず、ただ沈められた。大学というリングの上に立つには、あまりにも未熟で語学力不足であった。

たった数週間で“白い灰”と化した私の前にさらに立ちはだかったもの。それは、「孤独」である。言葉はもちろん、「自分」さえも分からなかった。ひたすら思考した。無力かつ人に迷惑をかける始末の自分が情けなく、部屋が牢獄（鍵はあるのだが）のように感じる時もあった。

そんな私を、私たらしめてくれたのは、紛れもない「友」の存在だ。会話もままならない自分に「Salut !」と声をかけてもらえること、それがどれほど私を救ってくれたか。日本人同士、互いに自らの「立ち位置」を示し合えた。彼ら一人一人との繋がり、すなわち、「自分」という存在をそこに見出すことが出来たのだ。それから私は、「孤独」だという「想像の病」に苛まれていた「自分」を、ロールプレイしているかのように俯瞰的に捉えられるようになった。

自分の中の何かが大きく変わったのではない。フランス語なんかよりも大切なものが今の私にはある。恐れるものはもう何もない。

(学部 2 年 村岡拓也)



「みんなありがとう！」

★この「NEWS」冒頭のカバー写真も村岡くん撮影。「レンヌと仙台は姉妹都市。50 周年の節目の年に行けて光栄です」

留学生の声 中国における外国語教育

中国においては、外国語教育が行われて以来、様々な改革が推進されてきた。長年かけて、全国の学生の中に英語教育が徐々に普及してきたが、国際社会に貢献できる人材が求められるにつれて、「英語以外の外国語教育」に対する関心が高まるようになった。

現在、中国の大学に設置されている英語以外の言語は 84 語に及ぶ。中国で広く知れ渡る 9 種類の外国語（ドイツ語、フランス語、ポルトガル語、ロシア語、スペイン語、日本語、イタリア語、韓国語、アラビア語）以外にも、スウェーデン語、ベトナム語、タイ語、チェコ語などの外国語も開設されている。

2017 年まで日本語は 500 ぐらいの大学で提供され、ついでフランス語はほぼ 270 校、ロシア語は約 140 校、ドイツ語は 120 余りの大学で提供されている。その前の開設大学数と比較して、殆どすべての外国語専攻はここ 5~10 年の間増加傾向にあることがみてとれる。今、フランス語は英語と日本語に続いて、中国で最も人気がある外国語の第三位になっている。

ところで、中国の外国語教育にはいろいろな問題があるが、日本の場合にも同様の問題が現れているかもしれない。数年の勉強を通して、「聴く」と「話す」能力が相変わらず低い、留学や海外勤務など実践的に運用する場合に、このような「受験外国語」は役に立たない、といった問題である。どのようにコミュニケーションの道具としての外国語能力を身に付けられるか、我々は深刻に検討するべきだと思う。

また、単なる知識だけではなく、より広い国際的なコミュニケーション力の重要性が強調されている。そのうえ、異文化を尊敬し、理解することも重視しなければならないと思う。(研究生 吳昊^{ゴウウ})



附属図書館主催の仏文オーダーメイド講習会

■オーダーメイド講習会…図書館が各研究室の学習内容に合わせて、書庫案内、文献探索法のレクチャー等を行ってくれるもの。今後は文学部の全研究室で開催したいそう。

秋には晴れて第一志望の市役所から合格通知を受け取った。留学していたリヨンと姉妹都市の自治体なので、いつかまたフランスに行けるのではないかと夢が膨らむ。人事の方に実は妊娠していることを伝えたら、4 月から働けるのかとても心配されてしまったので、受験中にもう少しお腹が大きくなっていたら合格できなかったのかもしれない。産休中は研究室にお邪魔させていただき、深井先生のフランス語の授業にも参加させていただいた。（熱い授業に感銘を受けたのか、お腹の中で活発に動いていました。おそらく良い胎教になったと思います）そして、年明けには元気な男の子を出産することができた。運良く息子の保育園も決まり、春からは無事に仕事を始められそう。あと 1 ヶ月遅く生まれていたら今年度の入園申し込み間に間に合わなかったようなので、ふり返って見れば全てが絶妙のタイミングだったなと思う。

辛うじて綱渡りからの大転落は免れたような気がする 2017 年。通常の 3 年分くらいを煮詰めたような中身の濃い 1 年だった。ホッと一息つきたい気もするが、一説によるとおみくじの効果は次のおみくじを引くまで続くらしい。今年はまだ引いていないので、2018 年も当たり年……!?
(学部卒業生 岩崎ちまき)

卒業生の声 当たり年

去年の元旦に引いたおみくじは大吉だった。どうやら運気は上り坂らしい。よく見ると最後に「運勢は大吉だが、方向を誤ると大凶に転落する大切なきときだけに、慎重な運気が望まれます」と書いてあって苦笑いしてしまった。

さて、おみくじが的中したのか、2017 年は激動の年になった。新年に転職を決意し、春からは公務員試験の勉強を始めた。ほとんど同時期に妊娠が発覚し、夏に結婚した。合格を信じて第一志望の市役所に通勤しやすいところに新居を構えたのはちょっぴり賭けだったかもしれない。それからは、大きくなっていくお腹を抱えて仕事を続けながら、仕事が終わるとカフェで試験の勉強をし、週末には試験を受けに行くという慌ただしい日々だった。不思議と辛さを感じなかったのは、働きながら転職活動をするので現職も転職先もそれぞれ客観的に見ることができたり、毎日動きまわって仕事をするので気が紛れて妊娠中の不快症状をあまり感じずに済んだり、面接官の方々に現職の仕事内容に興味をもってもらえたりと、全てのことがお互いに良い影響を与えていたからなのかもしれない。



「お宮参りにて」



サン・ファン館（石巻）にて

■2018年4月から創設される日本学国際共同大学院とのプロジェクトの一環で、グルノーブル大学とのワークショップが行われ、仏文研究室からは3名の大学院生が参加しました。まずは顔合わせと交流も兼ねて、石巻のサン・ファン館と石ノ森漫画館へ。



国際研究集会での発表

■グルノーブル大学とのワークショップのメイン・イベント、国際研究集会が2日にわたって開催されました。日仏の文化、社会、文学という広くくりで発表者が集まるため、専門外の人にも伝わる発表の仕方が問われ、貴重な経験でした。



同じく、研究集会での発表

■幅広い層が参加するので、使用言語は基本的に英語でした。口頭発表はフランス語も可でしたが、パワーポイントのスライドは全員が英語で作製しました。質疑応答も基本は英語です。フランス人は普通に英語を話しますので、私たちも頑張らなければ…

大学院生版 留学体験記 二度目のフランス留学

年が明け、仙台に雪が降り始めた頃、フランスのグルノーブルに旅立ちました。私は学部生の頃にリヨンで一年間の交換留学をしていて、今回は二度目の留学でした。二度目ということもあり、フランス語にもだいぶ自信がついたので、余裕をかましてこの地に来たのですが、着いて早々、大学が手配した寮がとんでもなく汚く、古く、臭く……本気で泣きました。挙句の果てに、部屋に住み着いていた害虫に刺され、腕や顔やら腫れあがり病院行きになりました。比較的すぐに腫れは引いたのですが、もうこんなところに住めない！ ということで、家賃や保証金の返金、新しい住居を手に入れるために、大学の担当者や寮の受付のマダムとバトルの日々が続きました。大変でした。でも三年前の私にはフランス語でバトルなんてできなかった！ と成長を感じ（単に気が強くなっただけか？）、最終的に返金は叶い。新しい住居は自分でなんとか見つけました。

三年前の留学生活で「おふらんす」への幻想はとっくに崩壊したと思っていましたが、甘かった。フランスはまだ私を鍛えてくれるようです。もう勘弁してもらいたいものですが、しかし、思えば、五年前はじめてフランスに来た時にはパリのメトロでiPhoneを盗まれたっけ。私はこの国で散々苦勞をしているような……。これから留学を目指す皆さんが読むであろう、この研究室NEWSにこんなフランスの悪口ばかりを書くべきではないのですが、実際フランスでの生活は大変です。しかし、こんなに苦勞をしても、留学が終盤に差し掛かった今、次はどうやってフランスにまた来よう？ とばかり考えてしまう程、私はフランスをこよなく愛してしまっているようです。（修士1年 牧彩花）

大学院生の声

東北大学フランス語学フランス文学研究室に編入して感じたこと

博士前期課程から別の大学へ移ることに比べれば、博士後期課程から別の大学へ移ることはあまり一般的ではない。だからこそ東北大に編入する前は多少の不安を抱えていた。あれから早一年。

修士論文に全力で取り組んだ自分はパスカルについて少しは心得た気であった。そこで編入後は研究会、学会、論文と精力的に取り組み、自己の研究成果の発表に努めた。その結果解ったことは、これまでの自分の研究が先行研究を出発点とする研究の深化／進化というより、ただ自分が関心を持つ対象を研究してきたに過ぎず、そこには学術的価値やパスカル研究への貢献という視座は殆ど無かったということである。それ故、日頃の研究指導では先生方から厳しいお言葉を戴くことも多々ある。しかしながら厳しいご指導にはいつも「学生を単なる文学愛好家に留まらせるのではなく、職業人としての文学研究者に育てて欲しい」という研究者としての学生の自立を願う先生方の思い遣りが隠れているように思う。研究環境の整備についても先生方は協力的だ。図書館に入っていない文献も直ぐに取り寄せて下さる。必要とあらばパソコンやプリンターなど高価な機器も揃えて下さる。研究者を志す優秀な先輩、後輩にも恵まれている。研究に必要な環境は十分過ぎるほど整っている。この環境の下、今年はパスカルについてどんな新しい知見を得られるだろうか。厳しくも創造的な博士課程2年目が幕を開ける。

（博士1年 鈴木真太朗）

卒業生の声 フランスで日本語教育に携わって

フランスはブルターニュ地方、レンヌに位置する大学で日本語教育の講師を勤めている。自分の職位はレクター (lecteur) と呼ばれ、2年間の契約を上限としている。実のところ、ここレンヌにあって、日本語教育の仕事内容や現状は極めて特殊といえる。

サブカルチャーをはじめとする、昨今のヨーロッパにおける日本・アジアブームに由来して、第二・第三外国語として日本語を履修する学生は年々増え続けている。大学の同じ位置にある他言語と比べても、日本語の学年ごとの履修生は数十倍という単位で異なる。ことフランスにおいて、日本文化が大きなブームになっていることは tant mieux (それはよかった) であると同時に、ブームの中にある語学教育の特異さも感じている。

私たちがフランス語を学習していても気づくことだが、自分の母語と全く異なる体系を持つ言語を習得することは、一筋縄ではいかない。私たちは日常でいくらかでもデフォルメされた表現を使っているが、日本語教育では文法規則に則ったパターンを用いる。アニメや漫画といった娯楽と異なり、学習者に楽しみを自動的に運んでくれるとは限らない。

一方で、この非常にかげ離れた言語を、地道にあるいは自然に習得していく学生もいる。自分が備えた文化や体系と異なる世界を学ぶことには、普遍的な喜びがあるのではないかと思う。かくいう私は、数年間フランス語も研究も離れて生活していた。他の仏文生に比べて、フランス語が得意だったことは一度もないが、ここレンヌの町で生活するには、よくいわれるフランスの不便さや問題を感じる事がほとんどなかった。パリから電車で1時間半ほど離れながら、小さなメトロやバスの交通網が敷かれ、美術館や劇場、図書館といった公共施設が置かれている。外国人としてこの町に存在し、見知らぬ人の愛情にどれだけ助けられてきたかわからない。業務に追われ、飛び出すように町をランニングすると、目に飛び込むのは日本で見る事のない造形をした建物、ずいぶん近く感じる空模様だ。

語学は私たちにいつ何を運んでくるかわからない。予想もしなかった就労という形で在仏生活を経験し、異文化に触れられる喜びと、それでもなお見える人間の普遍性を受け止め、「フランス語」がもたらした人生の豊かさを享受している。

(学部卒業生・レンヌ大学講師 内田智子)



「大学キャンパス入口。年季の入った建物と、新しい近代的な建物に分かれる」



「夕暮れのタボール公園。夕陽がとても映える街並み」

編集後記

今回もそれぞれ練られた力作の記事が集まりました。皆様楽しく読まれたのではないのでしょうか。ご寄稿頂いたメンバーには、ここに改めてお礼申し上げます。編集をしている私個人は、提出して頂いた全員の記事のどこかに深い共感を覚え、どの記事の中にも「私」がいるように感じました。そしてこれは東北大学仏文研究室にいる・いた皆様に言えることかもしれません。(阿部先生と数人の院生が取り組んでおられるテーマ「『わたし』の多層化と人称転換」ではありませんが……。)

この一年、博士課程にもなると研究や研究生活について小さな悩みを抱えることもありましたが、一方で純粋な興味や意欲を持って、この仏文研究室に入ること志す一年生や高校生がいるということに、私自身が支えられていることも実感致しました。フランス語とフランス文学を深めながら、その魅力を広く伝える先輩としても常にありたいと思う今日この頃です。

(博士1年 玉田優花子)

フランス文学研究室ホームページ

<http://www.sal.tohoku.ac.jp/French/index.html>

★随時更新中です！

「フランス文学研究室 NEWS」に関するご意見・ご要望は、以下の宛先までお願い致します。

TEL/FAX : 022-795-5973

Email : ange.no.shirabe@gmail.com